社説

2026.5.7

AI時代の教育

社会全体で学ぶ姿勢を

人工知能（AI）技術が爆発的に進化し、世界中が対応に追われている。

教育も同様だ。AI時代の人間に求められる能力をどう定義し、育むか。人とAIによる協働社会を見据え、社会全体で学び、向き合わねばならない。

AIの技術進化は加速度を増す。基本ソフトなどの脆弱（ぜいじゃく）性を突く能力が高いモデルが開発され、懸念が広がっている。悪用された際の影響が計り知れないことから、政府は官民で対応強化を議論する枠組みを設置するという。産業界では自ら分析、推論、行動するエージェント型AIの普及が本格化する。

こうした背景を踏まえ、社会に出る前の学生にAIの仕組みとリスクを教え、その可能性を学ばせることは必須となっている。国は、大学などの優れた教育プログラムを認定する「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度」を進めるなど、AI教育を後押しする。文系学生を含め、こうした基礎固めは今後も丁寧に進めたい。

ただ、教育現場の悩みは深い。AIの実行プロセスの自律化が進むとすれば、学校で育むべき力をどう定め、学生を導くかという教育目標も新たに問われてくるからだ。

県内産業界に多くのエンジニアを輩出する富山高専で、AI教育に携わる石田文彦教授は「教育も過渡期にあり、難しい」と率直に語る。その上で、現段階で学生に身に付けてもらいたい能力として次を挙げる。①課題を設定する力②AIの出力を疑い、検証する力③その出力結果を採用した理由を自分で説明できる力―の三つだ。

現実社会で解決すべき課題を見極め、問いを立てることは人間の役割であり、その結果責任を負うのも人間だということだ。AIと協働する上で、より強化が求められる人の本質的な力といえる。

こうした力は、高等教育だけで育つものではない。低年齢の子どもへの対応も喫緊の課題だ。次期学習指導要領は、小学生段階から情報教育を強化する方向という。文部科学省は「初等中等教育段階における生成AIの利活用に関するガイドライン」を2024年12月に更新した。生成AIをはじめAI技術の進化は速い。現場が迷うことのないよう改定を続けてほしい。

新技術に対しては学術や政治だけでなく、一人一人が触れ、学び、それぞれの立場で主体的に関わる態度が求められる。遠巻きに見るのではなく、試行錯誤が必要だ。社会全体で得た成果や知見を教育に生かしていきたい。